

孔子の教育

文學士 古川竹二

聖人孔子が今から二千年許り前に魯に生れ、治國平天下の道を説いて諸國を遍歴した不遇の人であつたこと。それから又孔子の言葉は論語と名づけられて、幾百千年を我國の祖先たちの教育や道德のしるべとなつたことは何人も知る所であらう。然るに明治に初まつた教育の世紀には、西洋の學說にひたすら心醉した傾きが見える。私はそれを

残念と思ふ、而して考へた、東洋には今日の我々教育家が依る可き何の教へも無いのであらうか、東洋は決して西洋文明の起源に劣らない文明の深さを有つて居るではないか。取る可きものが無い筈はない。私はそれで此の論語を読んで見た。(私はもとより漢學者ではない故に幾多の註を参照し

一、弟子に對する態度

孔子の弟子等に對する態度は、私等の學ぶ可き點が非常に多いと思ふ。以下少しく擧げて見よう。門人の孟武伯と云ふ人が或る時、孔子に孝とは如何なるものかを問うた時、父母は唯其の疾をこれ憂ふと云つた。又門人の子游が同じく孝を問うた時今の孝は是を(兩親を)よく養ふと謂ふ。犬馬に

至るまで皆なよく養ふことあり、敬せざれば何を以つて別たんやと答へた。又子夏が孝を問うた時、色難し。即ち己れの顔色を和らげて父母に事ふるの難きを諭した。

私はこゝで考へ度い、弟子たちが問うたことは何れも同じ孝である。然るに孔子の答へは三つ共に異つて居る。之は果して何を意味するか。思ふに此の三人は皆なそれゞゝ之等の點に於て缺くる所があつたからであらう。近時教育上で兒童の個性を知れと云ふ聲が盛んである。孔子は既に二千年の昔、弟子の個性を見て教育を説いて居た。私は今更個性の説に驚く要は無いのであつた。

○
吾れ回と云ふこと終日、達はざること愚なるが如し。退ぞいて眞の私を省るに自ら發するに足れり。回や愚ならず。と云ふ言がある。回は即ちあの有名な顔回である。顔回が只黙々として一言も違ふことなく師の言葉をさくが、之を、行ふにあ

たつては實に孔子を發明せしむるものがあつたので、回や愚ならずと言つたのである。私の教へて居る兒童にMと云ふ男の子がある頭の大きいばんやりした黙つた子である。他の子供たちは争つて手を擧げて何事にも答へようとあせるのにMは一向手を擧げぬけれども言はして見ると何時も立派に答へをする。之から押して教室でよく活動する子供必らずしも良き子供ではない。沈黙して居るものの中に猶ほ回の如き人もあるのである。私はMや決して愚ならずと私がにつぶやいて居る。

○

門人林放が禮の本義を尋ねた時、大なる哉問やと孔子が云つた。之は善い哉問やの謂である。賞讃したのである。私等は兒童の發する問ひにしても、善きものに對しては大に賞せねばならぬ。賞することは一つの大なる暗示である。兒童の好惡の傾向は往々にして教師に依つて定ることは、誰しも自ら經驗される所であらう。

次に、子曰く、道行はれざれば桴^{カタマ}に乗りて海に浮ばん、我に従う者は其れ由か。子路之を聞いて

であつた。孔子は眞に慧眼なる教育家では無かつたか。

大いに喜ぶ。子曰く由や勇を好むこと我に過ぎた

り。

取材する處なし。と、之は門人の由即の子路

との問答である。論語に現はれる多くの俊秀の中で私は此の子路を最も愛する。師が若し賢君なく仁義の道行はれず、予は舟に乗つて海に出でよう。其の時予に従ひ来るは由やお前であらうと云はれた時、本文に謂ゆる『子路之を聞いて大に喜ぶ』で子路は大に喜こんだのである。私には夫れ由かと云はれた時の、あのそゝつかしやの子路の如何

にも嬉し相な顔を想像することが出来る。孔子は然し此の場合尙ほ平常短慮な子路に、戒めの言を加ふることを忘れなかつた。取材するとは事理を辨へ取捨することを云ふのである。即ち餘りに勇み肌であつたのを訓戒したのであらう。然り、由が如きは其の死處を得じと孔子が豫言した様に彼は矢張り、そゝつかしい死に方をしてしまつたの

○

一日門人宰予が晝寝をしたことがあつた、宰予は、かねて口には忠信を語るも、行ひの之に伴はざる男であつた爲めに、朽ちたる木は雕るべからずと孔子は大いに彼を責めた。私は思ふ。兒童の時代は何事も動搖の時代である。過ちあらば之を責むるに躊躇してはならぬ、矯むることを極力せねばならぬ。

子曰く黙して之を識り、學んで厭はず、誨へて倦まず、何ぞ我れあらん。と孔子ほどの人にして猶何ぞ我にあらん即未だ上記の事が自分には出来ぬと云つた。我等は猛省せねばなぬ、私は學んで厭はず教へて倦むことなかつた、教師としての孔子の態度を羨むものである。幾度か反複しても尙ほ覚えない子供に對しては遂、荒々しい言葉にな

り勝ちの我等が學ぶ可き事ではないか。

又曰く我生れながらにして之を知るものに非らず、古を好み敏にして以つて之を求めるものなりと。即汲々として學に勉めて得たのであると云つた。然り巨匠ロダンも云つた。何物も忍耐強い勉強に代り得るものはない。只これにのみ生命の秘密がそれ自身を打明けると、偉大なるものとならんが爲めには執着の強い勉強が必要であらう。

猿使ひが猿を教へるに稽古半ばに他のものに注意を奪はれるのは駄目だと聞いた。我等は考へねばならぬ、敏にして求めねばならぬ。貧弱なる我等の背景を豊富ならしめる爲めに。

○

人を教ふる者は何等かの信仰を有し度い。今日のみの今日でなく、將來の爲めの今日であり度いその爲めには區々たる社會の變動に惱まされないだけの自分が要る。信仰が要る。孔子は夫れをして居た。鞏固なる自信の念は孔子と云ふ穩だやかな音の中に鬱勃として溢れて居た。次に少しく挙げて見よう。

子、南子を見る、子路悦ばず夫子矢^{チカ}つて曰く、予の否とする處は天之を厭せん。天之を厭せん。と南子は人も知る衛君靈公の夫人にして操行に於て缺くる處のあつた人である。孔子衛に行き此の南子の爾三の求めもだし難くて、遂に之に會ふことを諾したので、きかぬ氣の子路が不機嫌であつた爲めに子路に言つた言である。我否とする處は天亦厭せん、孔子は天を信じた。我が行ふ所は天の道にかなへるを深く信じた人であつた此の事は又次に述べる所でもわかる。

二、孔子の信仰

或る時宋人桓魋^{クンシイ}が事の間違ひから孔子を殺さん

とした。その時孔子は毅然として云つた。天徳を予に生ず。桓魋其れ予を如何せん。即天は予に徳を與へて居る。桓魋風情に害される様な予ではないと云ふ強烈な自信が見える。私かに思ふ、今の世の君子なるもの。多くは、有事の際に役立たぬ半面を有して居る。古ヘ君子の最たりし范仲庵は寝につく時一日爲したる處を反省し自己の費せしに價するだけの効果なれば寝るを得ないと云つた程の人であつたと聞く。然るに兵を率ゐて外敵にあたる時常に敗北であつた。かゝるを君子と云ふならば、我等は君子たるを欲しない。然るに我孔子は決して左様ではなかつた。温厚なるのみの君子ではなかつた。

前述の事件の後又匡人は孔子を殺さんとした事があつた。其の時も孔子は云つた。天の未だ斯の文を喪さず、匡人其れ予を如何せん。と、これは文王歿して禮樂制度に通するものは孔子であつた故に予死せば之を後世に傳ふる者はない。故に天が後世に之を傳へようと欲するならば、匡人などが如何にして天祐ある予を殺すを得ようと云つたのである。信すること厚きものには世量の落付しが

ある。我等は錯綜せる世に立つては、益々自ら信すことの必要を感じる。毀譽褒貶は何物ぞ、天予を知れりと嘯くだけの自信と、信仰を有し度い。教育者たる我等は特に此の必要を思ふものである。

孔子の病が篤かつた、子路は師を思ふの真心から門人を臣と云はしめ様とした時、孔子は欺いてはならぬ、吾誰を欺かん、天を欺かんや、と子路を責めた。天を相手にせよとは南洲翁も云つた。サツカレーがあのヘンリー・ヘズモンドの中に、子供ほど偽善なものはない、と云つた言葉が真なりとしても彼等の無邪氣さを害するものではなからう。然し乍ら大人は欺いてはならぬ欺いた跡は醜い。よし人を欺かうとも、如何にして天を欺かんやである。

以上にて孔子の信仰が如何なるものであつたかは察せられると思ふ。心ある方は何卒か論語を熟讀され度い。最後に最も好きな言葉を擧げて、すべての結論とする。

又川の上に在りて曰く、逝く者は斯くの如し。晝夜を舍てず。(十二月二十一日)